

# OSSの生活史

第六篇

モチベーションを高く持ちちやうと疲れるんですよ

語り手＝宮原徹

聞き手＝大川貴久

2026-08-24 63分



六

# モチベーションを高く持ちやうと疲れるんですよ

語り手＝宮原徹

聞き手＝大川貴久

2026-08-24 63分

——まず初めに、皆さんに最初にお聞きしているところとして。パソコンとかソフトウェアとかに最初に触った時とかがついているところから。

あ、そうですね。僕は今五四歳なんですけど、コンピューターに触れ始めたのが、多分一〇歳、一歳ぐらいですかね。一歳の誕生日に、当時NECのPC-6001という、ですね。当時はまだパソコンじゃなくてマイコンっていう言い方を。マイクロコンピューターと、マイ・コンピューターの両方をかけて、マイコンっていう呼び方をしてたんですけど。

PC-6001は、どちらかというと、その家庭向けみたいな感じのやつですね。あれが欲しくて買ってもらって、そこから、まあ自分の手元で騒ぎ始めたっていうのが、もともとですね。

で、その後いろいろ変遷があつて。大学時は法学部だったんですけど。いろいろレポートというか、文書を書くときにPC-9801とかを使ったりとかしていて。で、その流れでコンピューター系の仕事をしようということで、日本オラクルっていう会社に入つて、というような感じですね。

——その小学生の頃から、ずっとそのPC-6001あたりからそのまま継続して使われていて、つていうところ。

はい。もちろん途中で少し離れたとかいうこともあったんですけど。特に大学に入つて触るようになった、改めてまた。ですかね。中学、高校の時は、その後、何か買ったりとかはしてなくて。学校にあった、高校にあったやつを触るとか、なんかそういう感じで、少し距離があつたんですけど。大学に入つて、また改めて触り始めたっていう感じですね。

——法学部で使われてるってことは、普通に大学のレポートで使ったりとか、そういうことだったんですか。

そうですね。結局、ワープロ代わりに使うのが当時はやっぱり多かったんで。PC-9801を使って、文章を書いて、印刷して、みたいな。そういう使い方ですね。

——そこからパソコンに、もう一回興味というか、そういつたところが移ってきて。

はい。オープンソースっていう文脈で言うと、その頃にGNUと出会って。コンパイラだったとか、Emacsみたいなエディタだったとか。あと、そこからの流れでUNIX全般に興味を持ち始めて、つていう感じで。そういう意味では、今につながるコンピューターの興味みたいなのは、大学時代に、まあ趣味でコンピューターを触つてたところから来てますね。

——じゃあもう、大学生の頃からオープンソースに興味があった、ってところ。

はい。当時はフリーソフトウェア。で、大学時代は九〇年の四月から、九四年の三月までが大学生の期間なので、ちょうどその頃ですね。

——そこで乗った興味を、そのままお仕事にされていくような形だった。

結局、他に興味があるものがなかったっていうのもあって。どうしようかなと思った時に、コンピューター業界だったら、その興味のまま。あと、まあ昔から触ってるから、改めて勉強する必要があんまりないってことで、コンピューター業界に行こう、と。

——結構、分野が大学の中から変わっているのになっていうような。

よく法学部なのになんで、っていう話は。

——実際もうお仕事に入られてからも、普通にコンピューターとしてのお仕事というところでも、オープンソースが関わってくる、っていうようなことも。

実際のところ、オラクルって会社なので。今でこそ比較的オープンソースに理解がある会社だけど、当時はそんなにオープンソースっていう感じではなかったの。お仕事のには、あんまり直接オープンソースとは関係なかったんですけど。

ただ、一部、例えば、今はもうほとんど使われなくなっちゃいましたけど、サン・マイクロシステムズの Solaris。あの OS、Solaris なんかは、そのオラクルを動作させるための主要なプラットフォームだったの。なので、そこに、いろいろと GNU のソフトウェアをインストールして使っていたりとか。

あとは、ウェブ関係をやることが多かったの。そうすると、サーバーとして、当時だと NCSA のウェブサーバーですね。で、そこから、Apache になったりとか。いろんな、あと、ネットワークのサービスとかもいろいろ動かすために、個人的に Linux を触ったりとか。そんな感じでこう触り始めてましたし。

あとは、オラクルは六年いたんですけど。最後の頃は Linux 版のオラクルっていうのを、えー、会社として出すことになったの。そのあたりから、急速にオープンソース関係が仕事に近くなったっていう感じですね。

——それはもう、会社としての当時の機運だったっていうような感じ。

一番大きいのが、結構、現場でいろいろ話をしていると、Linux 版のOracleがあると嬉しいっていう声が多かったわけですね。

あの当時、そのあたりの私がやってた仕事は、どちらかというと、マイクロソフトのWindowsのサーバーを使って構築されるお客さんが多かったわけですよ。小規模なので。ただ、Windowsのサーバーって、やっぱり不安定で、こうちよっとトラブルが多いっていうのが、OS側のですね。

で、それに比べると、あの当時、少しずつですけど、やっぱりLinuxを使ったサーバーを、ウェブサーバーとかメールサーバー、あと一部データベースサーバーを動かすっていうのは結構出てきていて。特に、予算がないユーザーさん、お客さんなんかは、無料だからってことで、結構現場では使われ始めていて。で、かつ安定してたわけですね。

そうすると、やっぱりOracleみたいな、その商業データベースもLinux上で動くようになってくれたら嬉しいっていう。Oracleは当時、そういうセグメントのプロダクトとしては結構値段を安めに出してたんですね。だから、あまり高くなかったんで、Linuxと組み合わせても、まあ予算に収まるっていうぐらいのコスト感だったから。やっぱりLinux版が欲しいっていうお客さんが多かったんですね。じゃあ、やるか、みたいな感じになってやってた、っていうのが当時の状況ですね。

——Oracleを辞められたと言いますか、次に移られたのは、何かきっかけがあつて。

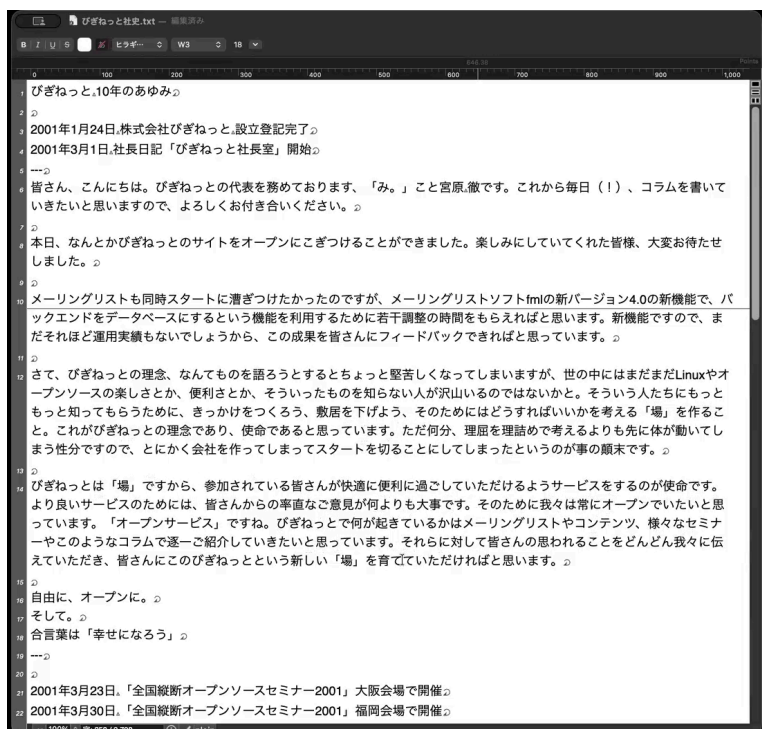
はい。これがですね、なかなか面白いというか。当時いた、Linuxをやっているグループがですね、ディストリビューションを作る子会社を作るっていう風にスピニアウトしたんですね。僕は全くディストリビューション作りに興味なくて。そっちじゃないんだよなってところで。

たまたま、当時手伝っていた会社が、ちょっと上場するので手伝ってほしいっていうふうに言われて。一回ヘッドハンティング的に誘われて、その会社に一年ほどいて。で、いろいろと経験する中で、なんか自分でちゃんと何かやることを決めてやらないとダメなんだな、っていうふうに気づかされて。

で、何をしようかなといった時に、多分、今後Linux、オープンソース、そして、ネットワークですね。これが広まってくだろうっていうふうに思ってた。で、えー、二〇〇一年に、えー、株式会社びぎねつとを、えー、設立した、っていう感じですよ。

——びぎねつとっていうのは、社名の由来がビギン・ネットワークみたいな感じの名前で、っていうところで。全体的に目指されていたものは、どういうところだったというか。

はい。これはですね、ちょっとですね、これ画面共有してもいいのかな。当時の設立趣意書的なやつが実はあって、ちょっと。



——はい、大丈夫です。

これがびぎねっとと社史という。うまく見えてるかな。はい、そうですね。これがですね、一月に会社設立で、三月一日か

ら、今で言うブログですね。まだブログという言葉がなかったんですけど、毎日日記を書いていてですね。これが毎日っていうね。コラムだから。ブログっていう言葉がなかったんで、コラムを書きます、っていう感じで。

で、当時はですね、やっぱりコミュニティの主な通信手段はメーリングリストだったんですね。今はもうメーリングリストなんかほとんど使われなくなっちゃってますけど。

ちょっと大きくしょうか。これがちょっと調整してます。で、ここをやっぱりですね、この当時の、やっぱりこう、記録を残しておくと大事ですね。

世の中にはまだまだ、Linuxやオープンソースの楽しさとか便利さとか、そういったものを知らない人がたくさんいるのではないかと。そういう人たちにもっともっと知ってもらうためにきっかけを作ろう。そのためにはどうすればいいかを考えれば、場を作ること。これがびぎねっとの理念であり、使命であると思っています、と。

なので、とりあえず始めちゃったよ、と。なので、びぎねっとは場なので、参加している皆さんが快適に便利に過ごしていただけるようサービスをするのが使命です、と。で、皆さんからご意見ください、と。オープンサービスですから、と。様々なセミナーやコラムで逐一提供していく場にしていこうと思います、という。

これが三月一日の、私が書いてた、当時の空気感みたいなのがすごく出てますね。だから、非常にこう、この時はマイナーだったんですね。やっぱり誰が作ったものかわからないようなものを、やっぱり業務システムに使うなんていうのは、考えられないっていうのが、もう、ほとんどの人の意見だったわけですよ。

で、それに対して、いや、そうじゃないよね、って思う人たちが、一定数いたわけなんですよね。ただ、感覚的には一割とかですよね。それは、はい、この時が。

で、それがもう今はもう完全にひっくり返って。オープンソースが、まあ多分、三割を超えると、なんていうか、認知されるというか。イメージ的には、今は多分、六割ぐらいの人がもう、オープンソースでもいい、って言ってる。残りの人が、多分、オープンソースかどうかかってないけど、サポートがあるんだったらいい、責任を誰かが取ってくれるんだったらいい、みたいな人ですかね。そういうイメージですよね。

そういう意味では、非常に、これをちゃんと書いておいてよかったって感じ。

その後、いろいろこうやってきて。例えば、二〇〇一年五月にリーナス・トーバルズにインタビューしてたりとかですね。いろいろやってますね。Linux十周年だ。ここがちょうどだから、二〇〇一年がLinux十周年だったんですかね。

いろんなセミナーやったりなんだからですね。で、オープンソースカンファレンスが二〇〇四年九月だ。創業して三年。いろいろ試行錯誤していく中で、オープンソースカンファレンスみたいな場を作るのがいいね、っていうことで、はい、やった感じですかね。

——オラクルのお仕事っていうのは作る側だったと思って、そこから広めていくところに変わられたところっていうのは、きっかけとかがっていうのはあったりとか。それとも自然と。

一応オラクル時代にですね、製品開発の部門とかにも行って、プログラミングもしてたんですよ。Javaプログラマーで。まだ出てきたばかりのJavaを使ったウェブサーバーのアプリケーションを作るとかやってたんですけど。全然ダメだったんですよね、プログラミング。あんまり得意じゃなくなってる。

どっちかっていうと、使う方が得意なんですよね。だから、セツトアップしたりとか、あと、システム設計したりする方が得意で。だから、あんまりこう、なんかプロダクト側ではなくて。どちらかというところ、お客さん側がどう使うかっていうのを、お客さんの立場に立って考えて、で、こういう情報ありますよね、っていうような感じでやってたのは、どちらかというと、製品のマーケティングとか、お客さんの支援だったんですよね。

はい、それもあって、知ってもらうためにイベントに出たりとか、セミナーを開いたりとかっていうのを、すごく頻繁にやってたんですよ。結構そのあたりは自由にやらせてくれる会社で。自分でやりたいですって言ったら、勝手に会議室を取って、で、告知をかけて、でお客さんを集めてやってもよかったんですよ。あんまり正式なプロセスがなくて。

そういうのを結構繰り返しているうちに。あと、イベントに出てオフ会やって飲み会やったりとか。今だったらごく当たり前で、すけど、ビールとピザみたいな、立食形式のワイワイやるようなやつとか。そういうのも先駆けて、オラクルにいるときにやったりとかで。

あれ、自分、結構こういうの向いてるな、と。その、場を作る、皆さんの世話役みたいな感じで。はい、集まって、って言うて、講師を決めて、聴講者を集めて、で、交流させて、みたいな。これをずっとやってたら、意外と向いてるなっていうのがあって。

なんか、技術もわかるけど、どちらかというと、皆さんにその知識、情報を交換する場を作るっていう方向かな、っていうのが。オラクルにいていろいろやってわかったことなんですかね。そっちの方向に、やっぱり後半はシフトしていった。

——そのままそれを、びぎねっとのお仕事としてやられていた、っていうところで。

はい。やっていったという感じですよ。はい。やっぱり自分でやると限界あるんですよ。

特に、東京一極集中を解消したいっていうのが、ちょっと裏テーマというか、思いがあつて。全国を回ってたんですけども、やっぱりね、人は集まんないんですよ。東京は集まるんですけど、それ以外の地域に行くと、やっぱり人を集めるのがすごく大変で。これは厳しいなど。

じゃあどうするか、って。で、いろいろ話を聞くと、情報はすごく欲しい。東京でいろんなイベントやってて羨ましいんだけど、東京に行くのがちょっと大変っていう、みんなが。

あ、そっか。じゃあ、なんか、こっちで、イベントをやつて。で、講師の人たちは、出張で、えー、遊びに来てくれるぐらいの感覚で行つて。で、うまいもんを食わせに行けば、絶対みんな来るだろう、ね、っていうノリで。じゃあ、ちょっとみんなで行くか、みたいなのをやりたくて。

で、まずは一回、まず東京でコアになるコミュニティとか、協賛してくれる企業さんを集めてOSCを二回やって。で、よし、じゃあ北海道に行くぞ、沖縄に行くぞ、みたいな感じで。二年目は北海道とか沖縄とかにみんなで行つて。で、翌日は、じゃあ北海道で、いろんなところ見に行くぜ、とか。沖縄だと、よし、みんなで車借りて美ら海水族館まで行くぜ、とか。

いう感じで。それ以外のところも、うちに来て、って言われたら、行きまーす、って言って開催して、みんなを引き連れていて。現地の人たちもわーっと集まってもらって、交流会やって、で、遊びに行つて、みたいな。特に最初の十年はそういうノリですよね。

みんなで、いわゆるOSCコミュニティが出来上がってきたから、喋れる人、情報発信できる人たちで、わーっと行くぞ、って。今でもそのノリですけど。あっち行ったりこっち行ったりして。情報発信したい人たちは、日程と場所とか諸々を決めてくれるから、それに乗っかって行くだけでいいみたいな。というのがメリットですよ。

——地域っていうと、どれくらいの地域で実際今までやられてたっていうのは。

ちょっと数えてみましょうか。一回しかやってないようなところもあるんですけど。北海道、岩手、福島で宮城、えー、そして千葉、東京、静岡、えー、金沢、石川県か。で、なんかちょっとガーツと飛んじゃうけど、島根。ちょっと戻ってきて、愛知、名古屋、大阪、京都。で、四国は四つですね。で、山口、あ、広島、山口。福岡。一九ぐらい。

今だから、ほぼ毎月だから、単純に言うとなん十か所以上ですかね。ちょっと入ってなかったところがあるかもしれないですけど。

——もうそこは、とりあえず実際やってみてどうだったかっていうところで、どんどん試されてるってこと。

結局やってみて、成果がそこそこ出たら、来年もやってもいいよね、っていう感じの。基本的に人数はあんまり気にしてないわけですよ。熱量というか、やりたいっていう人。

あ、そういう意味で、鹿児島でやったことあるんですけど、一人ですからね。今思い出しましたけど。でも別にいいんですよ。で、現地の人が半分、行った人が半分ぐらいでも、実はあんまり気にしていません。

なんか、現地にいて、で、東京とかなかなか行けないっていう人たちがいて。で、そういうところにも行ってみたいって人たちが、やっぱりいるわけです。で、交流したいっていうのがある限りは、まあどこでも。

ただ今、開催がちょっと多すぎて、小さい開催を差し込めないっていう。そこは現実的な問題なので。そこはやっぱり、OSCとは関係なく、なんか結構細かいテーマで勉強会とかが開かれるようになって、ものすごく増えたので。当時は勉強会っていう概念

がなかったの。それに比べると、今はもう勉強会も勝手にやれるので。

そこはもう、なんかOSCの役目としては、もう少し地域として大きめな、メタな交流会をやっというて。あとは細かい勉強会をそれぞれ、えー、日々はやってくださいね、っていう住み分けなのかな、っていうですね。

——じゃあもう、そのOSCが目指してたものが達成されつつある、というか。

一番基盤になるところ。例えば全人口が全国にあるんだとしたら、そのの、さっき三割って言いましたけど、だから三割ぐらい。これでまず抑えられれば。

なんとなく今だから、compassのイベントのグループだと多分OSPZが八〇〇〇人ぐらい、YouTubeのチャンネルも八〇〇〇人ぐらいなので。母集団としてはかなり、いわゆる一個のトピックで、もっとAIとか言うもののすぐ集まるけど。じゃなくて、逆にオープンソースコミュニティみたいな、若干、なんか、マイノリティに近いようなところで八〇〇〇人いるのは、まあそう、なんていうか、ネットワークとしては強力なんじゃないのかな、っていう気がしますね。

ただ、本当はやっぱ一〇〇〇〇〇人を目指しているの。あと二〇〇〇人ぐらいをどうやって増やそうかな、って。

——それも最初の頃から結構皆さん集まってくださってた、っていう感じだったんですか。資料とか見ると、結構最初からたくさんいらっしやるようなイメージだったんですけど。

そうですね。初回から五〇〇人集まってたんで。これも、いきなり五〇〇〇人の母集団があるわけではなくて。いろんなコミュニティが、それぞれ数十人ずつぐらいのコミュニティだったわけです。

で、寄り合いにして、メタに一個にくつついちゃうよ、って。あれですよ、スライムがポコポコくつくとキングスライムみたいな、いう感じで集まるっていうのが、元々のコンセプトなんですよね。

で、お互いが紹介し合う。そこで、こういう集合ができるじゃないですか。で、和集合。この重なる和集合を、どうたくさん接点を作るかみたいな。そうすると、あ、なんかそんなものもあるんですね、とか、今度一緒に何かやりませんか、とかいうような、その化学反応が起きるわけなんですよね。

——そういう形でどんどん集まっていたものが、だんだん時間が流れることに増えていく、といいますか。

そうですね。で、こう、初期のメンバーがどんどんおっさんになっていった。でも、ちょこちょことは、若手の子たちが。SecHackとかもそうだけど、常になんか若い人を開拓するプロ

グラムとかも走ってて。そういう人たちが、ちょこちょこ、なんか成果発表で来てくれたりとか。ハードルが低いじゃないですか。絶対発表できるみたいな。

——確かに、そうですね。

あそこは絶対発表できるから行けば、って言いたいな。査読とか一切ないんで。好きにやったら、っていう。

——それで言うと、そういうことを意識されて、っていうところが。

そうそうそう。そうすると、査読があるところに次のステップで行きやすいじゃないですか。まずはちよっと練習ってことで。

人の前で喋るための準備って何、みたいな。

だから、そこもこちらとしては、本当は人がたくさん集まってくれたら嬉しいけど、そんな集まんないかもしれないけど、気軽に一回やってみてね、予行練習だと思って、ぐらいの感じで入ってきてもらってやりました、と。で、どうだった、みたいな感じで。で、そこから本ちゃん行ってもらいっていう。もっと晴れ舞台というか、人がたくさん集まったりとか、見識のある、格のあるところにチャレンジしてね、っていうような。一番最初の練習台みたいな感じですね。壁打ち役の。

——じゃあもう、その、いろんな最初のステップに慣れるようなところ、といえます。

とにかく敷居を低く。で、申し込みがあったら全力でなんとかする。ちよっと場合によっては、ベテランの人に、ちよっとちよっと詰めてもらっていいかな、みたいな感じで譲ってもらったりとか。

——本当に皆さんが参加しやすくするみたいな場所。

もうベテランからすると、新しい人が来てくれた方が嬉しいよね、っていうのがあって。なので、ニュービーな人には、なんていうか、優先権。だから懇親会なんかでも、学生は千円、二千元でいいよっていう風にしたりとか。そういう感じで、若い人、新しい人を優遇するっていうのは常にやってますね。

——そういった形で二〇年間、もうほぼ二〇年以上続けられてるっていうところで。目的というか、そういうところとか、宮原さん自身が思ってたことっていうのは、もう変わらず、そのまま広めたいっていうところが。

はい、ですね。OSCの、なんていうか運営って、極力シンプルにしてるんですね。あんまり余計なことやらない。だから、セミナーと展示と懇親会、だいたいこの三本柱をしっかりとやるだけ、と。

だから、なんか事前の受付とかも、以前はもう少しちゃんとやってたんですけど、めんどくさくなってやめちゃったんですよ。

——毎回 compass の画面を見せてくださいますよね。

そう。で、こう、申し込みを入れとくと、だいたいの参加が来るような人数が。で、よくも悪くも安定してるので。例えば会議室が入りきれないってことはないんですね。

ただ、やっぱりどうしても濃淡が出るから、狭いところに人がたくさん行っちゃったりとかすると、他の部屋、大きい部屋の人が寂しくなっちゃって。ちょっと寂しかったな、って言われちゃって。そこは調整ができないっていうデメリットぐらいしか、逆になくて。

あとは、立ち見っていうのも、なんか単純に席は空いてんだけど、座りにくいなみたいな感じで、こう立ち見になっちゃったりとかするぐらいだから。それを考えると、あんまりこう、いちいちどれに参加しますみたいなのか、取ったりとか、誰が来たのかとか、そういうのは一切なしで。気楽に来てね、っていう。

——ずっと変わらず、変わり続けながら、というところ。

とにかくこの日にこの場所にみんな集まれ、ぐらいのノリが最初からあったんで。来てから考えればいいじゃん、ぐらいの。その場でなんとかすりゃいいよね、っていう。

——宮原さん自身も、そういうモチベーションは変わらず、そのままずっとやられている。

モチベーションは低いです。だから。

——そうなんですか。

モチベーションを高く持ちやうと疲れるんですよ。続かないですよ。だから、最悪、アンカンフアレンス状態で。この日にこの場所を取って準備しとくから、みんな来て、で、喋りたいってやつは、さすがにちょっとごちゃごちゃになるとあれだから、先にこうシートに書いてね、ぐらいの。川越では毎年それでやってる。一番のボトムラインなところで。

なぜか懇親会をやりながらなので、そっちの準備にみんな一番力を注ぐっていう。買い出しどうする、みたいな。そこに力入れすぎっていう。

それが、そのノリなので全然いいんですけど。だから逆に、ほら、それもできなくなっちゃったら、みんな飲み物、食べ物、自分で買って持ってきて、できるわけですよ。いつでも別にやめられるけど、やりたいから、やりたい人がやるみたいな。

——もう、集まってやるっていうことに、こう。

やるよって言って、適当に飲み物は買っとくけど、飲みたいものの、食いたいものの、自分で持ってきて、とかいうノリでも全然やれちゃうんで。

いう感じで、継続性第一ってなると。モチベーションはあんまり高く持ちすぎると、属人性が発生しちゃうんじゃないですか。その人ができなくなると、モチベーションが下がっちゃったりするから。と、途端に続かなくなっちゃうんですね。それは、やっぱりそういうイベントをいっぱい見てきたんで。

属人性がなくて、こうやる。とにかく、なんかもう惰性でやってるぐらいでもよくって。今年もまたやることになりました。別にこれ、誰も反対しないんで。またやんの、みたいな。

これ、大変だと、みんながやりたくなくなってるんですよ。そういうイベントをいっぱい見てきた。もうやりたくないみたいなの。もう実行委員は卒業です、みたいな。そういうのは、うちの実行委員にはないんで。はいはい、やりますよ、やりますよ、とか、行きますよ、って言って懇親会だけ顔出すとか。これが続ける秘訣ですね。惰性。

——モチベーションではなく、やり続けていくことに。

だって、ほら、モチベーションって定量化できないじゃないですか。定量化できないものに頼って何かをやるって、ダメなんですよね。

——やっぱりそういうところで、オープンソースに対するそういうのを続けていく上で、やっぱり難しいのは、モチベーションとかそういうことじゃなくて、続けていくかっていうところだったり。

だから、例えばリーナスとかって、もうLinuxから、ずっとずっとずっとやってるじゃないですか。なんだけど、単純に彼は自分が好きだからやってるっていう。だから高いモチベーションってわけじゃないんですよ。いわゆる義務感とか使命感じゃなくて、面白いからやってると。

僕もOSCは面白いから、全国飛び回りたいからやってる。OSCがなかったら行く理由ないじゃないですか。

今のところ、なんていうか、テーマ別の勉強会とかイベントってあるけど、いろんな人が集まるイベントってないんですよ、OSC以外に。いわゆる、その総合イベントみたいなものってなくて。で、老若男女、たくさんこう、投網式でバーっと集まれって言って集まるイベントってなくて。

だから、結構大きめのイベントとかって地方でも開催されるようにはなってるんですけど、あるトピックに限定されているか

ら。僕は技術的には、そういったイベントは地方では行われにくいところの技術をやってるから、あんまり行く理由にならないんですよね、残念ながら。

そのー、だから、ちょっと自分が偏った位置にいるからかもしれないんですけど。それだけにOSCって総合イベントとしては、やっぱりいいポジション。この一番、そのピラミッドの一番下のところみたいな。

で、どんどん狭くなるじゃないですか。専門性が上がっていくと、どんどんいろんな細かい山になっていくんですけど。一番下の裾野の部分をカバーしているの、どの山にも行けますみたいな。いう意味では、非常にいいポジションを取ってるなっていう。

——じゃあもう、そういう土台としての役割を持ちながらやられてらっしゃる。そこまでやられていく上で、今、続けていくことも大切っておっしゃってて。やっぱりそこまでの難しさとかっていうのはあったりとかします。課題じゃないですけど。

難しさを自分から感じるものっていうのは、実はあんまりなくて。なぜかという、さっきも言った通り、極力シンプルに、余計なことやらないっていう。だから、難しいなと思ったらやめちゃうんですよ。やらないこととか。そういう意味では難しさは感じないんですけど。

ただ、あえて言う。一つは、例えばリーマンショックとか三一一みたいな、大きな社会的な出来事がネガティブに影響すると。やっぱり協賛金が集まらなかったり、参加できないですって話になったり、っていう形で、一番シンプルなところにもろに来るわけですよ。

まあね、協賛金はともかく、出張できませんとか、行けませんっていうのが起きると、やっぱりイベントとして成立しないというか。あと、コロナもそうですよね。そういう、その社会的なインパクトのあるものが直撃すると、さすがに、シンプルに開催しますって言っても、そもそも無理です、ってなって。

だから、コロナはもう大急ぎでオンラインに切り替えて。で、かつ、オンラインなのに、地域性って何だよっていうのはあるけども。そこは多分、なんか全国メタのオンラインっていうところを作っても、多分移行できないと思って。

だから、OSCオンライン名古屋、という感じで。名古屋の人たちに声をかけて、これは名古屋ホストのオンラインイベントだから、名古屋に、今動けないで住んでる人たちが中心になってオンラインOSCをやってください、っていうような、一回、形にしたんですよ。

それによって、なんていうか、地域性っていうのをちょっと。ずっと続くとは思ってなかったんで、二年ぐらいかなと思っただけ。三年かかったかもしれませんけど。ずっとではないと思って、つなぎ

のつもりで、ちょっと定例会のホスト役を変えるっていう形を取ったわけです、オンライン時は。

それは、ただ、成功して。三年かかったけど、開けた時にスムーズに、じゃあ各開催を戻していこうね、と。場合によってはオンラインとのハイブリッドっていうのをちょっと組みながらやって。今はほぼ現地のみっていう形で、オンラインが逆に、最終的には全国っていう感じで、オンラインを大きく一回やりましてっていう形に、着地させられたってことですかね。

だ、ここはうまく僕の、え、期間の読みはちょっと外れたんですけど、意図が当たって。なんか比較的スムーズに続けられて。結構コロナ明けの開催は、みんな、とりあえず、あ、久しぶり、元気だった、っていう挨拶しかしてないみたい。もうちょい普通の話しろよ、お前ら、っていうぐらい、スムーズに着地できたっていう。

——じゃあもう、続けていく上でうまく適応していく、じゃないですけど、なんとかしていくっていうのができてるから。

そうなんですよね。全体的に言うと、やっぱり最初の十年かけてコミュニティを作ってきたので。その人たちが、やっぱり自動的に動いてくれる。

で、さっき、なんかモチベーション低くって言ったんですけど。突発的なモチベーションの高さは全然いいと思うんですよ。

もう割り切って、一発打ち上げ花火だけど、まあいいよね、その時のノリだし、みたいな。それは許容してるわけなんですよ。だから、突然何かやりたいですって言われたら、やったらいいんじゃない、っていう、別に、っていう。

ただ、それをずっと続けろって言われると結構難しくなるから。もう一個の難しさが、標準化してるんですよ、やっこることって。つまり、OSCっていうイベント、あるいはもう少し広い意味で言うと、コミュニティイベントのボトムラインってこんな感じだね、っていう。いわゆる、プロダクトで言うとMVPな、ところって、まずはこの辺だね、っていうのを作るってことを心がけてるんですよ。

それに対して、いや、イベントってこうでしょ、っていう意見を。で、それもあなたのイベントだけど、こっちは、必要最低限のイベントっていうのの標準化を事務局はやってるから。それ以上のところは好きにやってくれていいんですよ、っていう。

そこところが、下まで含めてこう、っていう感じで話をされると、ちょっとそのコンセプトが違うんで。だから、それは別に構わないけど、下の部分はこっちがやっとかから、三割方やっとかから、残りの七割を好きにやっつけてくれればいいし。OSCだけがイベントじゃないんだから、別の日程で自分でやればいいじゃないかっていう。で、手伝うし、っていう。

感じなんだけど、なんかOSCにこうしたいっていうモチベーションが強く来られると、ベースラインが崩れちゃうんで、事務局が困るんですよ。だから、基本的にはものすごく数が多いから、各回とも場所が変わるだけっていうレベルで仕事をしたいわけですよ、事務局サイドとしては。

そこは逆に言うと、各地域とか、フルタイムで動いていないコミュニティの人たちにはできないことをやってもらってるわけですよ、お仕事として。だから、横系と縦系なわけです。この横系のところに縦の論理をあんまり入れすぎると、横系が乱れるんですよ。

だから、極力、この時系列で何年も続けてくれている事務局のスタッフには、イレギュラーはあんまり入れたくないんですよ、例外は。だから、場合によっては例外処理は僕が引き受けるんですよ。あ、じゃあそれ、俺がそのタスクは俺がやるから、そこはもう手出さなくていいよ、っていう感じで。そこところは、すごく難しさですよ。

——そうですよ。OSCでやりたいことがある人ってたくさんいらっしゃる。

だから、OSCを変えるっていうよりは、OSCにただ乗りしてくれていいから。自分のやりたいことをやってくれたらいいから。

ただ、そこも昔は併催イベントをあんまりやらないようにしてたんですね。イベント内イベントになると、そっちのイベントにずっと入っちゃって、交流してくれないんですよ。それだと下手すると懇親会も別ですとか言われて。結局、会場をシェアしているだけだから、まあ別にいいんだけど、ちょっとなんかOSCの趣旨から外れるかなっていうことが多かったんですね。

最近はOSCの趣旨をよく理解してくれる人が企画を持ち込んでくれるので。お願いして。例えば、開始の時間はゼロ分から五分にして、一五分休憩で、行き来できるようにしてくださいとか。懇親会と一緒にやりましょうとか。あと、やっぱり朝から晩までずっと一部屋に閉じこもるみたいなプログラムの組み方は、できればしないでほしいとか。

いう感じで、いくつかのお願いをしたら、ああ、そうだね、って言って考慮してくれるので。そのところは、だいぶ、解消されたので。今は、だいぶイベントとしての人数が減ってきているのもあって、余裕があるので。イベント内イベント、ありますよ、と。じゃあ、三個までいいですか、みたいな。三時間とか四時間、午後取ったらいいですよね、と。懇親会は台流ってことで、合同でやりましょう、みたいな。

なんか、そういうのは、だいぶ。その、やっぱり先駆けが、ODCの中でLLイベントだ。LLも昔は、単独でやってたけど、だいぶ大変になってきたって話もあるし。こちらとしても、ありが

たい、コンテンツが欲しいので。じゃあ一緒にやりましょうよ、っていう感じで。ここ、毎年LLイベントと一緒にやらせてもらってたり、とか。

——今、人が減ってきたっておっしゃってましたけど、ここは難しさではない。

必然ですよ。だけど、さっきも言ったように、勉強会とかがすごく増えたんで。分散しちゃうんですよ。だから、これ、それ自体はしょうがないかなど。

ただ、人を目標にしちゃうと、結局コンテンツを変えていく形になっていくから。焦点にしている軸をどんどん変えてくつてことになって。で、それをやってくれている人たちがいるから、それでいいと。

こっちは、どちらかというと、なんか十年一日のごとく変わらない。オープンソースとか、オープンって何、っていうのを考える。それがいいと思っている人たちが集まれば。で、敷居が低いから、突発的に出てきた若手の子とか、今、突然、急にこれをやってるんですけどね、って人がポンって参加して、ちょっといろいろフィードバックもらって、っていうような感じでやっていく場として。

ただ、そうすると、やっぱり新しさはないから。みんなイベントって目新しさを求めるから。そうすると、やっぱり新しいところ

ろにやっぱり行きますよね。イベント参加のチケットって、やっぱり、数が限られてるんで。時間とかの問題が大きいじゃないですか。そうすると、やっぱり、新しい方のイベントに行くとか。

で、そこもちょっと考えていて。やっぱり、各開催のセミナーを今、毎回、二部屋とかを動画に撮ってるんですよ。で、YouTubeに今もう千本以上動画がアップされていて。で、さっき言った通り、チャンネル登録者数もうすぐ一〇〇〇〇〇人を目指せ、みたいな。

そのところで、今までだったらセミナーってやりっぱなしだったのを、全部アーカイブして、こう、多少ロングテール戦略というか。後から見てもらう。あと、違うセグメントの人が、あ、こんなのあるんだ、って言って見てくれるみたいな。

そのところに行くことによって、OSCの、そのリアル参加、リタイ参加はこの人数だけど、その後アーカイブを見てくれるって形での参加は、え、これだけ見てくれますよ、と。結構です。現地です手すると数人みたいなセミナーも、かけたら回数が回るわけです。

これはありなんじゃないの、逆に、っていう。だから結構、現場では、もう、ライブ収録してるもんだと思ってやってください、っていう。で、録画しているものに関しては。あんまり人数が来ないから寂しいって言い出すと、やるやらないの話になっちゃうから。そうじゃなくって、これ録画はしますから、後で

もう結構二桁、三桁行くんで、ライブ収録だと思って喋ってくださいっていう。

そこは結構、時代の変化ですよ。需要がないわけじゃないんですよ。結構あとで見ると。ただ、それを、ほら、目の前で、やっぱり人が少ないとちょっと、あれ、って思っちゃうじゃないですか。不確定要素だから。でも実際には結構見てくれますから、っていう。

その積み重ねがだいできてきたので。自信を持って、いや、これ、結構見てくれるんで、ちゃんとそのつもりで、この辺に二、三〇人ぐらいいるつもりで喋ってください、っていうお願いをしています。

——そこもやはり、時代の流れに合わせて対応していくような感じです。

タイパが要求されるので。YouTubeで倍速で。で、資料も当然ダウンロードできて。

変わったっていう意味では、その資料ダウンロードも、昔はあんまり回収とかしてなかったんですけど。資料くださいねっていう感じで、いただくようにしたりとか。あと、レポートもきちんと出すようにしたりとか。アフターケアの部分は、結構適当だったところは、大した手間はかけないレベルで、ちゃんとやるようにはしていますね。

動画の編集、全部私が一人でやっていますからね。半日ぐらいかけて。でも、頭とお尻を切るだけなんだよ。あと、たまに見えちゃいけないものが映っちゃったんで、ぼかしてくださいとか言われて、えーと、ぼかしどうやってやったっけ、とか思いながら。

ただ、その程度でね、なん、何十人の人が見てくれるんだったら、全然逆にコストパフォーマンスが高いわけで。これもやっぱり、続けるコツですね。これ、外注したら、とんでもない金額になっちゃうけど。僕がちょっと業務時間中にちょこっと半日ぐらいやるだけで行けるわけなので。翌週には出てますからね、もう。すぐに出すんで。これ、外注したら三週間後とかになっちゃう。内製化してるのも強みですよ。

——オフライン開催っていうと、私の印象としては変わらずやっていくかということだと思って。対応しながらやっていくからこそ続いているのかな、っていうのは。

そうですね。あり方は、やっぱりちょっとずつは、やっぱり微調整でいったりとかしていないと、なかなか難しいですね。細かいところではちょこちょここと。こうした方がいいかなって言われたものは、試しにやってみて。ダメいけんじゃねえの、っていう。

なんか、もっと試行錯誤で。さっきの動画なんかも、機材、最初は結構大げさなものを用意したりとかしてたり、ライブ配信と

かやってたけど。やっぱり大変なんですよ。大変なやつって、やっぱり続かないから、やっぱりやめようってことで。録画アーカイブで、機材も結構シンプルに、もう撮るだけ。

資料がよく見えなかった時は、すいません、PDFをダウンロードで手元で見ながら見てください、と。で、もうデモとかは壊滅的だけでも、これはごめん、っていう。しょうがないよね。本当に聞きたかったら講師の人に聞いてください、って。でも、やつてもらって。

——オープンソース自体が変わってきてるような気はしてるんですけど。オープンソースが変わっていくにつれて、オープンソースカンファレンスも変わっていつている、というような。それとも変わらない、っていうところ。

うーん、根本的なところでは変わらないんですが。やっぱりコンテンツはね、すごく変わりますよね。だ、それも結構、定点観測的に、みんながどういう話をしているのかな、というのをこう見ていると、僕も勉強になるっていうのが、やっぱりあって。

最近だとやっぱりAIの話がすごく多くて。ただ、これも、あんまり最先端を突っ走ってる話ではないんですよ。それがやっぱり、ほどほど感があっていいなと。現実的にこれだね、っていうところの話をする人がすごく多いんで。あー、なるほど、っていうような。

やっぱり最先端をね、こう追っかけようとする、それなりに大変なわけですよ。だから、そこをやりたい人は、別にそれやっているセミナーとかイベントに行けばいいわけなんですよ。OSCぐらいになると、そこそこ、こう、なんていうか、こうすると便利だよ、とかいうような感じの話をしてくれるので。

あと、やっぱりオープンソースにとっては、そのAIが生成したコードのライセンスどうするの、とか。あと、セキュリティの問題ですよ。そういったところに対してAIが入ってきてるっていうような、その現実的な課題とかがあるので。そういった話をするのできる場という意味では、参加者からすると助かってるのかなと。わざわざその新しいセグメントのところに出ていなくても、自分たちのやっていることに直接的に関わるAIの話っていうのを、こっち側でできるので。

そのところは、やっぱりOSCがあんまりコンテンツに踏み込まないのは。そういう時代の流れみたいなのを自然と、発表したい人が、やっぱりこれが必要だろうと思って、これを話したい、これを言いたいって思って来てくれるので。そのところは、現在のテーマを勝手に持ってきてくれるっていう、OSCのスタイルも、メルिटトなのかなと。かつ、話したいっていう人が来てくれるので。ある、ある、言いたい、みたいな感じの人がいっぱいいるので。

——今後のOSCっていうのも、このまま変わらないことと言いますか、このまま続けていかれるっていうことを第一に、っていうところですか。

そうですね。結局、すごく悩ましいのが。今のところは、オープンとか、オープンソースとか、オープンみたいなものっていうのが、カテゴリーとして存在しているし、そうではないっていうものとの、二項対立が成立しているから、オープンソースカンファレンスっていう立ち位置が成立してるんだけども。

それがなくなることは多分ないんで。あんまりその、なんていうか、そのコンセプトとして、オープンとクローズっていう二項対立の中で、え、こっちはオープン陣営だぜっていう、色分けみたいなのは、やっぱりないイベントが成立しないわけなんですよ。だから、そこは、大丈夫といえど大丈夫だけ。

オープンであることが結構当たり前になってきてるから。何を今更オープンソース。あと、オープンソースであることを知らないで、オープンソースを使ってる若者が多いので。そのところは、若干、イベントの根幹をなす部分に対しての、静かな脅威。

うん。オープンであることが当たり前だったり、オープンであること自体に価値を置けない。だって、オープンですよ、当たり前じゃないですか、っていう。

それは、うん、ちょっと変えていかなければいけないのかなとは思。そうすると、場合によっては、もう少し違うコンセプト

で、イベントの看板をかけ直すとか、なんかしないといけないですけど。

だから、オープンであることっていうのをちょっと置いておくとする。各地域で技術をやっている人たちが集まって情報交換をすれば、っていうのがあって。で、もう少し技術的に大きく包含するような、**「業界全体を包含するようなコンセプト」**っていう中で。ただ、どちらかというと現場寄りで、学生さんとか若手の人が参加して面白かったと思えるような位置づけっていう。

そのワクワク感が、オープンソースには最初あったわけですよ。ただ、だいたい手垢がついちゃった。じゃあ、次、ワクワク、AI。なんか僕らおじさんからすると、AIってあんまりワクワクはしないんですよ。どちらかというとAI嫌いな人たちがいたりするのって、ちょっと逆なんですよ。オープンソースの時に比べると。

だけど、AIじゃないんだよね。だから、やっぱりオープンであること、自由であることっていう立ち位置っていうのは、今のところは、その社会全体で見ると、やっぱり、ちょっとね、マイノリティの方がいいですよ。ちょっと俺、他とは違う感みたい。

OSCを見ていると、やっぱり若い子と、学生さんとか来ると、ちょっとこの子はきっと学校とかで若干浮いてんだろ、話が合わないんだろ、みたいな子が多いわけですよ、やっぱり見

て。でも、来ると、なんか同じ穴のムジナの奴らがいっぱいいるから、居心地いいんですね。そういう場になっていけてたら、ちょっといいなと思っていて。

だから、どちらかというとマイノリティ寄り。主流よりは若干反主流なところなんだけど、同志がいて、なんか自分たちがやっていることに對しての価値を再確認する場みたいな。それが、やっぱり今の OSC の立ち位置なのかな。最初もそうだったし、今でも変わらず、ちょっとはマイノリティ。

逆に、オープンソースって普通になっちゃったから、若干我々戸惑ってるみたいなの。え、みんなオープンソースって知らないで使ってるの、みたいな。Android がオープンソースとか、みんな知らないじゃないですか。でも動いてて。それはそれでいいことなんだけど、もうちょっと知ってほしいなあ、みたいな。

——それで言うと、オープンソースを広げたいというより、いろんな人に集まってもらうために、オープンソースっていう果たせる節があって、みんなに集まってもらう、みたいな感じになるかなっていう。

ただ、あんまりオープンソース、オープンソースって厳密に。ハードでもいいし、サービスでもいいし。うーん、ちょっとさすがにそれはね、っていうのはともかく、かすってるぐらいだったらいいね、って感じで集まってもらって。

あと、地域開催においては、地域で活動しているコミュニティだったら、ギリオッケーってことにしているの。なんか、工作してますとか。いいかな、みたいな。コンピューター要素ゼロだよ、みたいな。電子工作だからコンピューターじゃねえじゃん、みたいな。ソフトウェア何もないっすよね、みたいな。いいか、と。

——そういう、集まってできる場としてやっていきたい。

だったら、いいよっていう。

## 語注

**マイコン** 一九七〇年代後半から八〇年代の個人向け小型計算機の呼び名。マイクロコンピュータと「マイ・コンピュータ」を掛けた語。

**PC 6001** 日本電気が一九八一年に発売した家庭向けのマイコン。

**PC 9801** 同じく日本電気の個人向けコンピュータ。一九八〇年代から九〇年代の国内標準機で、ワープロとしても広く使われた。

**GNU** リチャード・ストールマンが始めた、自由に使えるソフトウェア群を作る計画。コンパイラやエディタEmacsなどを生んだ。

**フリーソフトウェア** 「オープンソース」という語が一九九八年に提唱される前から使われていた呼び名。無料という意味ではなく、利用や改変の自由を指す。

**Solaris** サン・マイクロシステムズの商用UNIX。

**NCSA' Apache** 初期のウェブサーバーソフト。NCSAのものを源流としてApacheが生まれた。

**ディストリビューション** Linuxの中核に、周辺のソフトをまとめて使える形にした配布物。

**リナス・トーバルズ** Linuxの作者。

**OSC** オープンソースカンファレンス。二〇〇四年に第一回が開かれ、全国各地で継続している。入場・参加は無料。

**OSPN** Open Source People Network。OSCなどのイベント運営を全国で支える活動体。

**compass** 技術系の勉強会やイベントの告知・参加登録に使われるサイト。

**アンカンファレンス** あらかじめ発表内容を決めず、集まった人がその場で持ち寄って進める形式。

**MVP** Minimum Viable Product。必要最低限の形で作り、動かしながら育てるという考え方。

**LL' ODC** LLは、二〇〇三年に「LL Saturday」として始まったイベント。当初のLLはLightweight Languageの略で、手軽に使えるプログラミング言語を扱っていた。二〇一七年からは「Learn Languages」と名を改め、言語を広く扱う催しとして続いている。ODCはOpen Developers Conference。

**タイプ** タイムパフォーマンス。かけた時間に対する満足の度合い。



## 奥付

本書は、情報通信研究機構（NICT）が主催する SecHack365 の、二〇二六年度融合駆動コースにおける活動として編んだものである。

本書に収める各篇は、クリエイティブ・コモンズ表示・改変禁止四・〇国際（CC BY-ND 4.0）のもとで公開する。出典を示せば誰でも自由に使えるが、書き換えたものを配ることはできない。

これに加えて、各篇の語り手および編者は、原文の趣旨を損なわない範囲で本文を翻訳し、その翻訳版を公開・配布することを許諾する。その際は、翻訳であることと翻訳者名を示すこと。

### 第一篇

2026年7月15日 オンライン 57分39秒

### 第二篇

2026年7月17日 オンライン 46分20秒

### 第三篇

2026年7月23日 オンライン 51分47秒（冒頭欠）

### 第四篇

2026年7月18日 オンライン 56分24秒

### 第五篇

2026年8月1日 対面 40分47秒

### 第六篇

2026年8月24日 オンライン 63分

### 第七篇

2026年8月26日 オンライン 43分32秒

### 第八篇

2026年8月27日 オンライン 61分33秒

### 第九篇

2026年9月2日 オンライン 50分16秒

### 第十篇

2026年9月5日 オンライン 76分07秒

### 第十一篇

2026年9月9日 オンライン 49分03秒

### 第十二篇

2026年9月9日 オンライン 45分26秒

### 第十三篇

2026年9月10日 オンライン 54分37秒

### 第十四篇

2026年9月20日 オンライン 55分03秒

### 第十五篇

2026年9月23日 オンライン 72分22秒

第十六篇

2026年9月27日 オンライン 53分21秒

第十七篇

2026年9月30日 オンライン 88分47秒

第十八篇

2026年10月5日 オンライン 68分47秒

第十九篇

2026年10月6日 オンライン 56分00秒

聞き手・編

大川貴久

書名

OSSの生活史 第一集

編・発行

大川貴久

連絡先

okawa.takahisa.25@shizuoka.ac.jp

発行日

2026年9月10日